

りんご病害

1 予報（3～4月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
黒星病	早	多	(1) 3月の気温は高い予報であり、りんごの展葉が早まり、感染開始時期が早まる見込み。 (2) 前年秋期の発生園地率は平年より高かった。(+) (3) 4月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、発生に好適な条件。(+)
モニリア病	—	並 (平年少発生)	(1) 前年の発生園地率は平年並だった。(±) (2) 4月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
腐らん病	—	並	(1) 前年の発生園地率は平年よりやや低かったが、胴腐らんの病斑数は平年並だった。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【黒星病】

- (1) 本病の一次感染源は、前年の被害落葉上で作られる子のう胞子であるため、被害落葉を芽出前までに処分する。
- (2) 重点防除時期である開花7～10日前及び開花直前に、EBI剤もしくはカナメフロアブルを散布するが、両剤は降雨直後に散布すると効果的である。気象経過に注意し、適期防除を心掛ける。
- (3) 耐性菌の発達を防ぐため、落花期以降は本病を対象としたEBI剤やSDHI剤を使用しない。
- (4) 散布ムラが無いように十分量を丁寧に散布。
- (5) 苗木を定植する際は、頂芽のりん片で越冬する可能性があるため、必ず頂部を切り返す。
- (6) 苗木及び未結果樹も成木と同様に防除を徹底する。

【モニリア病】

- (1) 雪融けの遅れ等、園地が湿っていると子実体の生育に好条件となる。常発園では消雪促進や排水対策、除草、落葉処分等を励行し、園地が早く乾くよう努める。
- (2) 発芽期以降、まとまった降雨（目安は降水量が合計5mm以上）があると子実体が成熟し、その後に孢子飛散時期（例年4月第3半旬頃～）となるが、年により変動するので防除速報を参考とする等、今後の動向に注意し防除が遅れないようにする。
- (3) 防除は、展葉期前後の葉ぐされ防除とその後の治療散布（開花7～10日前散布、開花直前散布）を組み合わせた体系を基本とする。
- (4) 展葉期前後の葉ぐされ防除では、ストライト顆粒水和剤及びパスポート顆粒水和剤は降雨前に、ベフラン液剤25は降雨後に散布すると効果が高い。多発園では、降雨前・降雨後のどちらに散布しても効果が高いネクスターフロアブルまたはパレード15フロアブルを選択する。
- (5) その後の治療散布では、葉ぐされ病斑が小さいうちに治療効果の高いEBI剤もしくはカナメフロアブルを散布すると、花ぐされの発生を防ぐことができる。なお、開花7～10日前散布及び開花直前散布の両方に治療効果の高い薬剤を散布する場合は、展葉期の葉ぐされ防除を省略できる。
- (6) 葉・花ぐされの発生が見られたら、見つけ次第摘み取り処分する。

【腐らん病】

- (1) 発病や前年の病斑からの再進展は、3月頃から確認されるので、処理済みの病斑、切り口癒傷部、摘果痕や採果痕等注意して観察し、早期発見に努める（図1）。本病は、発生樹及びその隣接樹に次年度も発生する傾向があるので、発病歴のある樹とその周辺も注意して観察する。

- (2) 枝腐らんの早期発見に努め、見つけ次第剪除する。
- (3) わい性樹の胴腐らんでは、側枝基部の発病が多いので、この部分をよく観察する (図1)。
- (4) 胴腐らんは、病斑を見つけ次第、患部を残さず紡錘形に丁寧に削り取り、その上から本病に有効な薬剤を塗布する (図2、3)。
- (5) 削り取った病患部や剪除した枝は、園地内に残さないよう処分を徹底する。
- (6) 剪定の切り口、日焼け、凍寒害、枝折れ等の外傷部には、トップジンMペースト又はバッチレート塗布する。トップジンMオイルペーストは、外傷部の癒合を阻害するので使用しない。
- (7) 多発園では、芽出前にトップジンM水和剤、ベンレート水和剤、ペフラン液剤 25、または石灰硫黄合剤を散布する。できるだけ動噴で散布し、薬液が幹にも十分付着するようにする。



図1 わい性樹における主な胴腐らんの発病部位

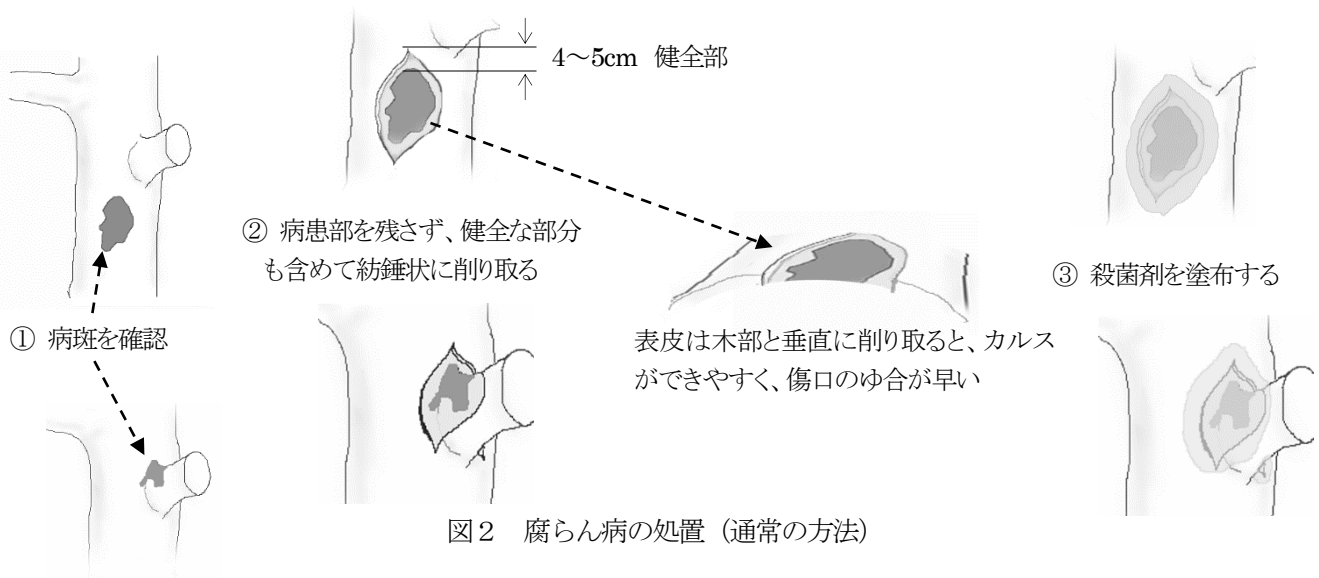


図2 腐らん病の処置 (通常の方法)

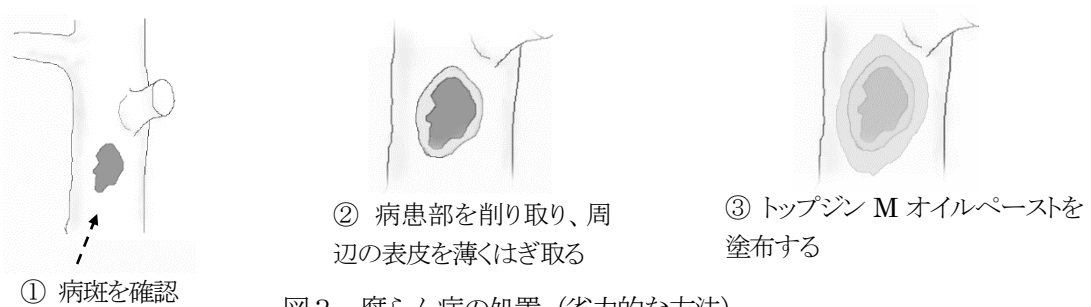


図3 腐らん病の処置 (省力的な方法)

トップジンMオイルペーストは浸透性が強いので削り取りの作業時間を3~4割短縮できる。

※ トップジンMオイルペーストは、胴腐らんの処置にのみ利用する。

りんご害虫

1 予報（3～4月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
ハマキムシ類	やや早	やや少	(1) 4月の気温は、平年より高い予報であり、発生時期は平年よりやや早い見込み。 (2) 前年の発生園地率は、平年よりやや低かった。(－)
リンゴハダニ	越冬卵 ふ化時期 やや早	やや多	(1) 4月の気温は、平年より高い予報であり、発生時期は平年よりやや早い見込み。 (2) 前年秋季の発生園地率は平年よりやや高かった。(＋)
キンモンホソガ	越冬世代 羽化時期 やや早	やや多	(1) 4月の気温は、平年より高い予報であり、発生時期は平年よりやや早い見込み。 (2) 前年秋季（第4世代）の発生園地率は、平年よりやや高かった。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハマキムシ類・リンゴクビレアブラムシ】

(1) 芽出10日後（展葉期前後）の防除薬剤は、有機リン剤を使用する。

【リンゴハダニ】

- (1) 剪定時等に枝の分岐部等を注意して観察し、越冬卵が確認された園地では、芽出前～芽出10日後（展葉期前後）までにマシン油乳剤で防除を行う。特に、近年発生の多い園地では、芽出前～芽出当時の防除に努める。
- (2) マシン油乳剤を散布する場合は、風の弱い日にムラが出ないようにゆっくり丁寧に十分量を散布する。



図 リンゴハダニの越冬卵

【キンモンホソガ】

- (1) 越冬は被害落葉の中で行われるので、前年秋季に多発した園地では、羽化前（りんごの芽出前）までに園地内の清掃に努める。
- (2) 第1世代幼虫による実害は少ないので、薬剤による防除は一般に不要である。

【ナシマルカイガラムシ】

- (1) 発生がみられた場合は、芽出前にマシン油乳剤を使用する。
- (2) 前年、ナシマルカイガラムシの被害があり、芽出前にマシン油乳剤の散布ができなかった場合は、芽出10日後（展葉期前後）にアプロードフロアブルを散布する。